あの日を繰り返さないで

樽床静子

運命の日八月六日、私は二十八歳、額に白鉢巻、もんぺ姿で被服廠（しょう）の下請工場である。軍服の縫製工場で働いていた。午前八時過ぎ、窓の外が一面に白くピカッと光った途端に工場の天井がドサッと落ちてきた。動力ミシンの騒音で音は判らなかった。一瞬私は爆弾が工場に落ちたと思った。大きな戸棚の前にいたので、天井の梁（はり）の直撃はまぬがれたが、外に出ることが出来ない。僅かな隙間を見つけて壊れた窓枠の金網を広げてくぐり抜けようと頑張った。早く出ねば火が廻って焼死する。手はガラスの破片で血だらけ、その時誰か外から引張り出してくれた。礼を言おうと立上ったがその人は急いで走った。

私も人の後に続いて走り出した。その道も、ガラスや瓦礫（がれき）、血の滴りで生々しい。皆、頭や手足から血を吹出しながら逃げる。比治山に軍隊が掘った大きな地下壕があった。その前で比較的けがの軽い人達が、助け合って手当を始めた。まず止血。体一つで逃げて来た者ばかりで、包帯も間に合わず、白鉢巻、ハンカチ、手拭を裂いて縛る。皮膚が焼ただれてぶら下がっている人、どうしてだか判らなかった。次々に集まる負傷者をどうすることも出来ない。その時空襲と言う声に慌てて穴に飛び込む。中は人で一杯。

傷の痛みを訴える声、水を求める重傷者、子ども。別れ別れになった肉親の安否を気遣って泣き叫ぶ声、悲鳴に近い悲痛な叫びはこの世の生地獄だ。あまりのことに死を覚悟で外に出た。空地や広い道路の両側に重傷で歩けない人や、死んだ人の遺体が運び出され並んでいる。市街地は方々から火が出て煙がもうもうと上がっている。どこにも行けない。また壕の中。六日午前十時頃から七日午前三時頃まで、十七時間あまり座り続け、ぎっしり詰めでお尻の下は地下水でびっしょり濡れている。

燈一つない壕の中は真っ暗闇（やみ）。少しあたりが静かになった。心身共に疲れ切ったのだろう。痛み